

おはようございます。
長崎大学人、河野茂です。

先月、メール配信しましたが、多くの学生や教職員の方からお返事を頂きました。
ひとりひとりに返信すべきですが、なかなか時間が取れずに申し訳ありません。
ひとつひとつ読ませて頂き、皆さんの熱い想いに元気を頂きました。

ある学生さんからは、＜長崎大学を通したくさんの「新しい世界」とつながることができました＞と、前向きな言葉をもらいました。
また、別の学生さんからは、＜入学当初から、河野学長のメールに感化されたり、励まされたり、慰められたり、学びがあったり＞という嬉しいコメントがありました。
ある職員からは＜長崎の未来と大学の未来＞を真剣に考えるメールを頂きました。
ありがとう。大切にしたいと思います。

10月に発信した学長メールの続きで、お約束通りに下記のメールを発信します。
順不同になるかもしれませんが、よろしくお願いします。

- ◎＜長崎の新しい世界＞は、才木 邦夫 理事
- ◎長崎大学の＜価値、価格＞の問題は、波多 順子 監事
- ◎経済的視点から見た世界の今の動向や本学の立ち位置などは、田中 健一 理事
- ◎新型コロナウイルスに対するワクチンの動向 森内 浩幸 教授
- ◎新型コロナウイルスの世界的な動向、いつアフターコロナとなるのか？ 金子 修 教授

本日は、元長崎新聞社長の才木理事です。

社会への「出航」準備

理事（広報担当） 才木 邦夫

15世紀の大航海時代直前。地中海から大西洋に抜けるジブラルタル海峡は、当時のヨーロッパの人にとっては、世界の西の果ての門でした。
海峡を領有するスペイン王国にとっては、その門を守っていることは、誇りでした。
海峡の狭い切り立った崖は、ギリシャ神話最大の屈強な英雄、ヘラクレスの二本の足にたとえられ、王家の紋章には、この二本の足を象徴する二本の柱と「この先はなし」という意味の「Ne plus ultra」いう文字が書かれていました。

海のは無限の闇に落ちていくと。

この当時の概念をぶち破ったのが、おなじみ、コロンブスです。

大西洋を西に進み、カリブ海諸島に到着し、ジブラルタル海峡が西の果ての門ではなかったことを証明してしまいました。

西の先には新しい世界が広がっている。

さあ、大変なのは、王家です。

しかし、よくよく考えてみると、最果ての門がだめなら、未知の世界への入り口ではないか。

まさに究極の逆転の発想です。やはり知恵者がいるんですね。

否定の「Ne」をとって「Plus ultra」、さらに先へ、とし〈「科学の目科学のこころ」(長谷川眞理子著、岩波新書)〉、今ではスペインの国のモットー、つまり標語になっています。

大海に船出する、こんな帆船の雄姿を想像するに、私には本学のロゴマークが重なります。

鎖国時代、海外との交流の窓口になった出島に往来したオランダ船。

その舳先に長崎大学の略称NU(Nagasaki University)を冠し、追い風をいっぱいにはらんで帆を広げ、いままさに出航せんとする(長崎大学HP参照 <https://www.nagasaki-u.ac.jp/ja/guidance/logo-song/logo-mark/regulations/>)。

未知の世界に踏み出していく、断固たる覚悟、そして挑戦を感じませんか？

もちろん、やみくもに格好よく挑戦だといって、いきなり「航海」に飛び出すことがいかに愚かかは、誰だって理解しています。

ち密な戦略の下、時間をかけた周到な準備が不可欠です。ただ、こんなことは、誰でもやるものです。

問題は、どれだけハードに努力したかです。忍耐強い、強靱な精神力が必要です。

2002年、「高分子のソフトレーザー脱離イオン化法」の開発で、学士としては初めてノーベル化学賞(本学では2008年、「緑色蛍光タンパク質」の発見で故下村脩先生が受賞)を受賞された、田中耕一さん(島津製作所シニアフェロー)。

氏は著書〈「生涯最高の失敗」(朝日新聞社)〉の中で、ストックホルムにあるノーベル博物館の館長(当時)が分析した、過去100年間のノーベル受賞者に共通する9つの資質を紹介しています。

それは、勇気、挑戦、不屈の意志、組み合わせ、新たな視点、遊び心、偶然、努力、瞬間的ひらめき、です。

氏は研究が暗礁に乗り上げながらも、試行錯誤を繰り返していました。そんな折、大きなミスを犯します。

試料を分析装置にかける準備のとき、間違っいつも使っているアセトンの代わりにグリセリンを金属超微粉末と混ぜてしまいました。

試料はネバネバですぐに間違えたと分かりました。でも、そのまま捨てるのは「もったいない」。

小さなころ、世話をしてくれた、祖母の口癖だったそうです。

この実験結果がノーベル賞につながりました。

氏は言います。「挑戦する勇気はあった。不屈の意志もあった。組み合わせて使う新たな視点もあった。

間違って混ぜたものを使ってみるかという遊び心もあった。瞬間的なひらめきだったかもしれない。間違いも偶然。失敗続きでも努力した。

しかし、こうした性格は、誰もが大人小なり持っている。能力が備わっていないと思い込み、せっかくの能力を抑え込んでいませんか？世の中に役立つ機会を逃してはいないでしょうか？」

発想の転換が出来る柔軟な思考と、ハードな努力に耐えられる忍耐強さを、皆さんは身に付けているでしょうか。

加えて、自らの可能性を自ら削ってしまう思い込みはないでしょうか。

分野の違いはあっても、学生の皆さんにはいずれ現実社会が待ち受けています。

今を大切に、無為に過ごした時間は戻ってきません。

あなたの中の「長崎大学丸」の出航準備は大丈夫ですか？

才木理事、ありがとうございました。

新聞の記事のように、楽しく読ませていただきました。

<出航準備>という言葉が出てきましたが、常に我々は、必要な知識や技術を磨き、世の中の風を読み、船を出す準備を怠らないようにしたいですね。

もちろん、そこには、出航するという覚悟が持つことが一番重要であるということは、長崎大学人のあなたは知っていると思います。